

「石ころからでも」

2024年3月

理事長・チャプレン 井上 良作

『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。
言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。
(マタイによる福音書3章9節)

個人的な話で恐縮ですが、年が明けてしばらく経ったある週末の日、学生時代に所属したある同好会のOBOG会が開かれるというので上京しました。卒業して三十数年も経っているのに、先輩後輩、同期の仲間との関係性は変わらず、「一瞬であの頃に戻れる」などとよく言われるものですが、本当にそういうことがあるのだなと実感し、懐かしさや嬉しさで時を忘れるような不思議な経験をしました。こうした企画は実行委員の方々の入念な準備が不可欠ですが、その中心で最も労苦したのは同期のS君でした。彼の仲間に対する愛情、皆でまた一緒に集まって同じ時を過ごしたいという情熱が無ければ、決して実現しなかったことは疑いの余地がありませんでした。特に、私のように、卒業後、神に仕える道を選んだなどという勝手な理由で長く連絡も疎かにしている人間を探して声をかけるのは本当に大変だったろうなと思い、すまないという気持ちと感謝でいっぱいになりました。

バブル景気の最中に社会へ出た先輩や同期の仲間らは、その後歩んだ道のりは様々なれども、皆それなりに立派に社会に貢献し、中には国を代表するような大企業の支社長や取締役になっている人もいました。S君はと云えば卒業後、そうした一見華やかな大手企業の世界を尻目に、下町にある小さな電気工事会社の家業を継ぐ道を選びました。学生時代からよく気がつく、他人の面倒を見るのを厭わない人柄でしたが、卒業以来数十年間、家族や社員とその家族の命運を背負って働いてきたS君にはリーダーシップが染み着いた風格と人を包み込む大らかさが備わっていて、この会を仕切っていた彼が誰よりも輝いていて素敵でした。人の大きさは愛の大きさなのだと強く感じました。

山本有三という作家の『路傍の石』という小説があります。主人公の愛川吾一は、純真な少年で中学校へ上がりたくて受験勉強に励んでいました。しかし、旧家に生まれ育ちながら、父親は仕事もせずに係争ごとを繰り返して財産を失い、吾一の中学入学資金も無くしてしまいました。落ち込んだ吾一に、担任の次野先生が叱咤激励する場面があります。

「おまえの気持ちを考えると、先生は大いに同情はするけれども、しかし、無謀なことをやったものだな。」

「……………」

(次ページに続く)

「中学へ行けないくらいのこと、そんな考えを起こすやつがあるものか。そんなちっぽけなことじゃ、けっして大きな人間にはなれやしないぞ。— 愛川、おまえは自分の名まえを考えたことがあるか。『吾一』っていうのは、じつに、いい名まえなんだぞ。」
「……………」

「吾一というのはな、われはひとりなり、われはこの世にひとりしかないという意味だ。世界に、なん億の人間がいるかもしれないが、おまえというものは、いいかい、愛川。愛川吾一というものは、世界じゅうに、たったひとりしかいないんだ。どれだけ人間が集まっても、同じ顔の人は、ひとりもいないと同じように、愛川吾一というものは、この広い世界に、たったひとりしかいないのだ。(中略)おまえはまだ子どもだから、しかたがないと言えばしかたがないが、鉄橋にぶらさがるとは、べつに勇ましいことでも、大胆なことでもないんだよ。そんなのは匹夫(ひつぷ)の勇というものだ。— 死ぬことはなあ、愛川。おじいさんか、おばあさんにまかせておけばいいのだ。人生は死ぬことじゃない。生きることだ。これからのものは、何よりも生きなくてはいけない。自分自身を生かさなくってはいけない。たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間、生まれてきたかいがないじゃないか。」

(山本有三『路傍の石』の一節を、筆者が中略・編集の手を加えました)

冒頭に挙げた聖句は、洗礼者ヨハネが、ファリサイ派、サドカイ派という、紀元1世紀当時のユダヤ人社会で特権階級意識に驕っていた人々に語った言葉です。アブラハムとはユダヤ人の偉大な父祖であり、聖書の中でとても重要な人物です。ヨハネは、「自分自身の価値に驕ってはいけません。神様は憐れみ深く、どんなことも可能な方であって、道端に転がっている石ころからでさえも、誇り高いアブラハムの子を作ることができるのだ」と教えたのでした。

学年の終わりの月となりました。清教幼稚園の5歳児さん、中学3年生、高校3年生にとりましては、慣れ親しんだ環境に別れを告げ、新しい旅立ちの時であります。みなさんが仲間と共に過ごしてきた日常は、一日一日、一瞬一瞬がどれもかけがえのない時であります。時には、物事が思う通りに行かず、悩んだりふさぎ込んだりする日もあったかもしれません。しかし、人は、落ち込んだまま生きることもできますが、それに抵抗して自分を輝かせることを選ぶこともできます。

旧約聖書のイザヤ書に『**わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し(ている)**』(イザヤ書43章4節)という言葉があります。石ころさえアブラハムの子に作り変えられる神様は、あなたのことを、この上なく価値のある存在、この世でたったひとりの、かけがえのない存在として見ておられ、その歩む道をどこに進んでも見守っておられ、いつも変わらず将来に期待しておられるのです。あなたが自分のすることに愛情を込めて取り組むならば、人との出会いや関わりに愛情を込めて向き合うならば、神様はあなたの道をどんなに素晴らしいものに輝かせてくださるか、そのことに疑いはありません。